
アンチテーゼ

神崎 ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンチテーゼ

【Nコード】

N3518B

【作者名】

神崎 ゆう

【あらすじ】

情報化し、進化していく社会……。その中に、本来存在しえないはずの者達がいた。自らの未来はないと知った者達は、一つの志を掲げ、最期の燈を『現実』にぶつける決意をする。ここに、『魔法使い』の敗北の戦いが始まる……！

序

カーテンを明けて、外を眺めてみる。その先にあるのは庭か、隣の家か、高層ビルか、田舎ならば草原が広がっているかもしれない。何の事はない。これが現実だ。誰かが外を眺めれば、その先には必ず何かがある。目線を少し上にやれば、そこには空があるはずだ。何の事はない。

当然のごとく存在しているもの達がバランスを取り、普通という状態を保っている・・・筆者はこの当然の世界に飽き始めている。別に自殺志願というわけではない。欠けてはならない友もいる。生きることに對する無意義さを抱いているわけでもない。ただ、不思議なほどにバランスの取れたこの世界に、ちよつとした変化を加えようとしているだけである。

先程外を見た。では問いたい。外の景色の中に、『面白いもの』はあったかと。特別目を引くものはあったかと・・・。この際に素朴でもいい。何か変わったものを見つけたなら、あなたの飽きは満たされるだろう。満たされ、新たな意欲が湧いたなら、それに越したことはない。だが、もし無いなら、この小説に目を通していただきたい。

バランスの取れた秤のバランスを崩すにはどうすればいいか。倒すのではない。あくまでバランスを崩すのだ。

答えは単純。どちらかの器に、重さを偏らせればいいのだ。現実と空想・・・このバランスを崩すには、空想の器に入っていたものを、現実の器に移し替えればいい。それだけの話である。何の事はない。問題なのは、空想の器に入っているものの内どれを移し替えるかである。

色々思うところはあるかもしれないが、今回は『魔法使い』と言う要素を、現実の器に入れることにする。何だ、よくあることじゃないか。確かにその通り。しかし、忘れてはならない。これから始

まるのは、空想の器の中で、空想と空想が戦う物語ではない。

現実の器に入れられた『魔法使い』は少数。『人間』が世界中に巢食っている中に、突如放り込まれたのだ。しかし、『魔法使い』にその自覚はないし、『人間』に至っては『魔法使い』の存在にすら気付いていない。極々一部の者達を除いては……。そして自分達の滅亡を確信した『魔法使い』は、ある計画を実行に移す……！

さあ、現実と言う命題に対し、それを否定する命題を突き付けてみようではないか。その時現実とは、アンチテーゼにどう対処するのか……。現実の世界に存在しえないはずの者達は何を思い、誰に何を託すのか……。それはこれから始まる物語を読んでもらえればわかることである。どうか、この物語の結末を見届けてほしい。

筆者

第一章 動きだす齒車 1

教会がある。すでにボロボロで、壁に絡み付いた木の根がその古さと不気味な雰囲気を醸し出している。教会と言ふよりは悪魔の館と言ったほうが適切かもしれない。しかし、内部の事情に至つては、悪魔の館とはかけ離れていた。

老爺が連結した長い椅子に横たわり、それを十数人の者達が囲むようにして立っている。ある者は涙し、ある者は絶望、或いは諦め^{ある}の表情を浮かべながら、弱々しい呼吸を何とか続けている老爺を見つめているのだ。横たわっている老爺は、まもなく訪れるであろう己の終焉に、これまでの人生を振り返っている。

辛い人生だった。

この世に生を受けてから約九十年……。普通の者とは違うものを持って生まれた自分は、他とは違うが故に蔑まれ、人間の輪に入ることも許されないまま生きてきた。生死の狭間を彷徨いつつも何とか水分を得て、必要最低限の栄養を瘦せこけた体に与えた。大人になり、己の一般とは違うものを隠した上で、ようやく仕事に就いた。それからしばらくして、あることを知った。自分と同じ力を持った者達がいると。

それを知ると、自分は世界全国に散らばっている、自分と同じ力を持った者達に会いに行つた。世界に住む約六十億もの人間の中にいる者を探して、世界を飛び回つた。そして悟つた。我々を待っているのは滅亡だということを。

その力を持った者は、通常よりも早く体が脆くなる。力を持っていることが、肉体に負担をかけているのだらう。少ないケースの中で平均すると、寿命は五十歳程度だ。

それでもどこかの貧しい国に比べれば充分長い命だが、それを計算に入れても、滅亡は免れない。

力を持つ者達を初めてこの教会に集めた時、自分以外の者達の年

齡が、一部の例外を除いて一致したのだ。偶然と言ってしまうばそれまでだが、この状況を把握した我々は、ある結論に辿り着いた。力を持つ者が生まれるのは、ある一定の年に集中しており、これ以上増える見込みはなく、今集っている者達が最初で最後である……。つまり、力を持っているのはこの教会にいる者が全てである可能性が非常に高いのだ。

親から子へは遺伝しないのかと言うと、今までそれが確認されたのはたった一つ。可能性は0ではないが、あまり期待はできないと言うのが我々の考えた結果である。

待っているのは滅亡……。しかしこのまま消えていくと言うのも癪だ。そう思った我々は、ある計画を立てた。我らの存在を世界に示す計画を……！

「ファイル……」

「はい」

薄く目を開けると、老爺が一番近くに立っていた少女の名を呼んだ。膝まである長い金髪をした少女は、すぐに老爺の近くに膝を就き、皺だらけの細い手を握る。

彼女もまた、『力』を持った者の一人である。

その整った顔立ちに、苦しさは見られない。しかし、これまでどのような人生を少女が送ってきたのかはわからない。ただ、老爺に寄り添っている少女は美しかった。

「わしの死後は、お前が同志達の指揮を執れ。我が人生をかけて立てた計画……。その行く末を見届けることはできぬが、お前なら成功させることができる」と信じておる」

老爺の言葉を、少女は黙って聞いている。その心の内では、何を思っているのだろうか……。

「異端とされる我らだが……。この計画を成功させることでそれも変わる」

老爺の立てた計画は、ただ『力』を持った者達の存在を示すだけのものではない。もっと悲惨な……。少女には残酷すぎる計画だ。

そのことは少女も重々承知しているが、一途な彼女を見る度、老爺を初めとする者達は申し訳ない気持ちになった。

自分達が少女を見つけていなければ、彼女がこのような計画に参加することはなかった。うまく力を隠し、一般人としての人生を送ることもできた。普通に生きる権利を奪ってしまった罪悪感が、彼らの心から離れることはなかった。

「もはや後戻りはできん……。結果としてお前の命を奪ってしまう我々を、どうか許してくれ」

心の底からの謝罪だった。横たわった状態では頭を下げることもできないが、その意思はしっかりと少女に届いている。

初めてこの教会に來た時から覚悟はしていた。自分は『普通』をいきることなどできないと。どうせ無理なのであれば、この命が美しく散ることのできる道を進みたい。

「我々に勝利はない。だが、勝利が必ずしも成功と言うわけではない。敗北が失敗と言うわけではない。お前達の生きざま、しかと世界に伝えるがよい」

「……はい」

少女が強く手を握る。この老いぼれにも、その暖かさが伝わってくる。素晴らしい同志達に巡り合えた。我が人生、一片も悔いはない。

「同志達よ、諸君の未来に幸あれ……！」

それが、老爺の最期の言葉となった。

「……」

もう力のない老爺の手を、少女は無言で握り続ける。彼が『力』ある者達が集うことはなかった。ひたすら光のない人生をいきているしかなかった。彼がそこから救い出してくれたのだ。

どうか、私達の英雄に安らかな眠りを……。

「計画を実行に移します。彼を連れてきて下さい」

老爺の冥福を祈った少女が言い放った。その言葉に『力』を持った者達の間に波紋が広がる。

「何を考えているんだ、ファイル！奴は裏切り者……」

老爺の見つけた『力』ある者達が完全に集ったわけではない。ただ一人、彼の誘いを断り、一般人として生きることを選んだ男がいたのだ。

ただならぬ覚悟を持って集まった者達から見れば、その男は同志を裏切った卑怯者でしかない。しかし、その主張を少女が制した。「気持ちちは分かります。しかし、今は一人でも多くの人材が必要なのです」

少女とて納得しているわけではない。可能ならば、裏切り者の力など借りずに事を進めたい。だが、それができるほど容易い計画ではないのだ。

借りれるのであれば、裏切り者だろうがなんだろうが借りるしかない。正しく猫の手も借りたいと言う状況なのだ。

「計画の第一段階です。私が彼の元へ行きます。その間、何とか時間を稼いでください」

そう言うと、他の者達の意見も聞かずに少女は去った。

「くそっ！何故あのような卑怯者のために……」

わかつていたことではある。しかし納得がいかない。わざわざ時間稼ぎに力を回す必要があるほど、あの裏切り者に価値があるとは思えないのだ。

奴の力が優れているとは聞いたことがある。それでも……。

「そう怖い顔するんじゃないよ。決めただろ、皆で計画を成功させるって」

未だ遺憾の色を隠せない青年の肩を、姉御肌の女性が叩く。

女性は『力』持つ者達の中でも人を纏める能力に長けており、同志達からの信頼も厚い。そしてこの青年とは一線を越えた仲である。「セレーナ……」どうしてそんなに落ち着いていられるんだ！？第一段階の時間稼ぎは、お前の役目なんだぞ」

青年が第一段階に対して否定的な態度をとるのは、裏切り者のことが許せないだけではない。セレーナと言う人物が、そんな事のた

めに自らを投げ出さなければならぬことが納得できないのだ。

彼女はこんなにも早い時期に散るべき人物ではない。それをわかつているから、彼女にこの役目が回ってきたことに腹を立てている。「あたしは納得してるよ。なのにあんたが笑顔で送り出してくれなきゃ、安心できないじゃないか」

どうしてそんなに冷静なのだ……。普通なら俺じゃなく、お前が怒るべき状況のはずだ。

青年の心とは対照的に、セレーナは微笑みを絶やさない。

「まーた辛気臭い顔してる。絶対に死ぬって決まったわけじゃないんだから、そんなに必死にならなくても……」

嘘だ。この計画の全貌を理解している青年からすれば、この計画に参加することはイコール死と言っても過言ではない。生きて還ってはこれない……。そう思えば思うほど、自分の無力さに嫌気がさした。

自分は強くない。セレーナを守るほどの力はない。何故自分はこんなにも無力なのだ……！

「ガルベス、お願いだからそんな顔しないで。決意が鈍るでしょ。あんたが何を言っても、あたしは行く。けど、フィルを責める事だけはやめて。彼女がいてこそこの計画なの」

「……わかってる。だが……！」

自分への怒りを込めて、思い切り壁を殴る。セレーナの言うとおりだ。フィルがいなければこの計画は成立しない。計画の真意はもっと深いところにあるのだ。

「お前を失いたくない……。いかにしてくれ、セレーナ！」

本心からの訴え……。届かないことはわかっている。しかし言わずにはいられない。この計画から外れてほしい。生きてほしい。愛する者を失うのは嫌なんだ。

「……ありがとう。ガルベス」

彼女は俯き、そのまま走り去った。彼に涙を流す姿を見られなくなかったのだろう。

こんな時、慰めてやることもできない。胸を貸してやることもできない。やはり、無力な自分が齒痒い。

「畜生っ！」

広い教会に、ガルベスの声が響き渡った。

フランス、パリ。

早朝、社会人は生活のために会社に出勤し、学生は面倒臭がりながらも学校に登校する。何の変哲もない、町の様子である。

その普通な人通りのなかに、一人の少年がいる。他の学生と同様にカバンを担ぎ、穏やかな緑色の目で学校へ行く途中にある信号が青になるのを待っている。

勿論、信号待ちをしているのは少年だけではない。左には老人、右には女性が立っており、少年同様、青になるのを待つ。

そして信号が青になった。それを合図に、立ち止まっていた者達が歩きだす。

「……？」

何か落ちている。ペンダントだろうか。位置から考えて、恐らく女性のものだろう。

「あの、落としましたよ！」

落下物を指差して言うが、女性は気付かずに歩いていく。直接渡そうと、少年はペンダントを拾い上げた。

綺麗なペンダントだ。大事なもののだろうか……自分には関係のない話なのだが、つい色々考えてしまう。そんなことよりも、早くこれを渡さなければ。もし大切なものだったら大変だ。

女性に駆け寄り、自分の頭より高いところにある肩を叩く。すると女性は振り返り、少年に目を向けた。

「あのこれ……貴女のものですよね？」

そう言い、掌のペンダントを見せる。

「ええ、そうよ。わざわざありがとう、坊や」

ペンダントを受け取り、少年の頭を撫でる女性。何とも姉御肌な感じのする人だ。こういう人が近くにいてくれたら心強いだろうな……。

第一印象だけでしか判断できないが、こんな人が近くにいてくれる人を羨ましく思う。僕の周りにも、こんな人がいてくれたら……そう言う叶いもしない願望を抱かずにはいられない。

「坊や、名前は？」

「テ、テリオスです。テリオス・ギルハート」

少年の名を聞き、女性が一瞬目を見開く。しかし、余裕のないテリオスはそれに気付かなかった。

「いい名前ね。坊や、両親は？」

自然な問いであるが、女性は平常心を保とうと必死だった。まさかこのようなところで収穫があるとは……彼は今、どうしているのだろうか。

しかし問うた途端、テリオスの表情が暗くなった。しまった、怪しまれたかな……女性は不安になる。

「父も母も……数年前に」

女性は心の中で驚愕した。目的の人物はもうこの世に存在していない。だが、今更引き下がることもできない。大丈夫だ。彼女なら正しい判断を下せる。そう信じよう。

そうする以外に自分にできることは何もない。

「……坊や、いいことを教えてあげる」

テリオスは学校へ行く気だろう。それではいけない。

「今日の学校はなくなるから、家にいた方が得よ」

「え……どうしてそんなことを」

学校側からそのような連絡はない。それは即ち、普段通り登校しろということだ。それが変更になる……何かが起きるのだろうか。何故それをこの女性が知っているのか。

改めて見てみるとこの女性……他の人達とは身に纏った雰囲気が違う。姉御肌とか、そう言う違いではなく、もっと根本的な違いだ。

まるで、存在そのものが違うような感じがする。

「いい？家から出てはダメよ」

そう言っと、女性は有無を言わずに去る。これでいい。彼に教える必要はない。それを知る理由も、自分の名も。理由については嫌でも知ることになるだろうし、名を教えても意味がない。

どうせ、彼と会うのはこれが最初で最後なのだから……。

第一章 動き出す齒車2

ため息をついてみた。何も起こらない。もう一度ため息をついてみた。

やはり何も起こらない。時計の針が進むごとに、いったい何をしているのだろうか、と言う罪悪感らしきものが襲ってくる。

実はあの後、女性の言う事に従って、学校をサボってしまったのだ。嗚呼、何と言うことだろうか。今までは盲腸になるうが四十度の熱が出ようが、必ず校門をくぐり、授業に没頭していたと言うのに……。両親がこの世を去ってから、自分はどうもおかしい。

正直な話、自分には学力以外他人に誇れるものが何もない。運動神経がいいわけでもないし、専門的な技能を持っているわけでもない。時々容姿が可愛いと言われるけど、それは他人との距離を縮めるためのスキんシップであって、参考にはならない。

学校に行くと、やたら女の子と親しくしている人がいるけれど、そんな芸当、僕には無理だ。

となると、やはり学力しか残らない。この実力資本主義の御時世に、何のとりえもない人間が生きていけるわけがない。世の中で生存するためには、何か他人とは違うものを持つていなければならぬのだ。

しかし、冷静に考えてみると、学力で勝負することはさして珍しいことではないため、他のことよりも不利だと言うことがわかってくる。

他の事とはつまり、モデルのように容姿で給料をもらったり、スポーツ選手のように己の身体能力を用いて数億もの金を稼いだり、お笑い芸人のように他人を笑わせることで生活をやり繰りしたり、俳優や声優のように、その演技力によって自分の力を証明したりする事。学力によって将来の道が開かれるのは彼らと変わらないが、余程でない限り公に出る事はない。

別にそれを望んでいるわけではないけれど、報酬と言う現実を見ると、余裕があるとは言えない。

彼らだって大いに苦労しているんだろうし、学力においても就く仕事によって余裕があるかどうかは大きく変わってくる。けど、僕の持っている先入観としては、学者にいいイメージはない。

かと言って、他にできることがないのだから、自動的に道は決まってしまうわけだけど……。

『ココアでも飲もうかな……』

台所に行き、ポットに水を入れて沸騰させる。意外とこれに時間がかかる。それまでの間どうしたものだろうか。誰か尋ねてきてくれれば、こんな憂鬱な気分にならずにすむのだけれど。

ピンポン。

インターホンが鳴った。誰かが僕を訪ねてきたらしい。都合がいなあと思うつつ、玄関へ向かう。

「はい、どなたですか？」

訪ねてきた相手に問いつつ、ドアの覗き穴から外を見る。

相手は一人ではなかった。二人いる。まず目に入ったのは、金髪の少女だった。年はテリオスと同じくらいだろうか。しかし困ったことに、知り合いではない。

隣にいる男性は、大体二十代前半と言ったところだろうか。灰色の短髪で、顔立ちは格好いいと言うのが一番わかりやすい。が、やはり彼も知り合いではない。

まったく知らない人がこのタイミングで自分を訪ねてくる……何やら怪しい感じた。

「開けてください……と言ってもダメでしょうね。危ないですから、ドアから離れて下さい」

テリオスの問いに答えたのは女の子の方だった。離れていると言われても、いったい何が危険なのかわからない。どうしていいかわからず、ただ立ち尽くす。

だが、そんな彼のことなど、ドアの向こう側にいる彼らがわかる

はずもなかった。

「氷山の頂に佇みし女神よ……我が言の葉により、汝の力をここに映さん」

目を瞑り、片手を空に向ける少女。いったい何をやっているのだろうか。

最近はある人が多いらしいから、迂闊に相手にしてはならないと学校で注意された記憶がある。この人がそうなのかもしれない。だとしたら相手にしない方が……。

「ゴッド……グレイス」

フイイイイイイ……。

少女の目が水色に光り、同じく水色のオーラが少女から発せられる。オーラに包まれた少女は宙に浮き、金色だった髪はオーラと同じく水色になり、絶え間なく、かつゆったりと揺れる。彼女の横に立つ男は、彼女の選択をただ横で見ていた。

向こうはこちらを警戒している。今の世の中、余程の世間知らずでない限り、知らない人間に開けてくれと言われてドアを開ける人間などいない。故に、無駄な問答を繰り返す前に、全てを示す方法を選んだのだ。こうでもしなければ、相手はこちらを受け入れないだろう。

一方、少女の呟きだけを聞いていたテリオスは、まったく状況をつかめていない。

一体何なのだこの人たちは……。警察に連絡したほうがいいのか……などと考えていた、そのときだった。

「ペタル・フリーズ（氷結する花弁）！」

ビキビキビキ……ッ！

突然、冷たいものが手に触れた。

「……氷？」

透명한冷たいもの……それは水が凝固したもの、氷だった。

ビキビキビキ……ッ！

聞いているだけで寒くなりそうな音をたて、ドアが氷に包まれて

いく。

「なっ……な……」

今の気温は20度。氷が発生するような条件はそろっていない。にも関わらず、氷は無情にドアと、テリオスの心にある現実を包んでゆく。

音がおさまったとき、ドアは完全に氷付けとなっていた。信じられない……と言いたげな表情で、テリオスは氷らしき物に触れてみる。冷たい。やはり氷だ。

「まだ扉の前にいるのなら、今すぐ離れて下さい。怪我をしますよ」
外から警告の言葉が聞こえてくる。のんきに冷たいなど思っている場合ではないらしい。突然このような超常現象を起こした者の言葉だ。警告が死刑宣告のようにすら聞こえてくる。

彼に何かを言う余裕すら残ってはいない。テリオスは急いで扉から離れた。

バリーンッ！

まるでタイミングを見計らったかのように、氷が見事に砕け散った。扉と一緒に。少年の思う『現実』の定義と一緒に。

少女を包んでいたオーラが消え、細い足が地につく。先ほどまで水色に変わり揺れていた髪は、さも何事もなかったかのように金髪に戻り、重力にしたがっている。

もともとドアがあったところを跨ぎ、少女と男が家の中に入ってくる。このとき初めて、テリオスは二人の全体的な容姿を確認した。

「あ……あわわ……」

目の前で起きた超常現象に、腰を抜かすテリオス。

そんな馬鹿な、ありえない。気温二十度の空気の中、水滴が零れていたわけでもないのに氷が発生するなんて……しかも、扉を丸ごと包んでしまうような規模で。

有り得ないとするならば、今しがた自分が見たものはいったい……。

「テリオス・ギルハートさんですね？」

床に腰を落としているテリオスを見下ろし、本人かどうかを確認する少女。頭の中が混乱しているテリオスは、正直にうなずくしかなかった。

彼の返答を受け止めた少女が男に視線を送る。彼女の言いたい事を理解したのか、男はテリオスに大きな手を差し伸べる。

「どうやら『立て』と言いたいらしい。こちらとしても、腰を抜かしたままの間抜けな姿をよく知りもしない人間に晒していただくはない。男の手をとり、何とか立ち上がった。

「自己紹介をしましょう」

テリオスに歩み寄り、今度は少女が手を差し伸べる。

「お初にお目にかかります。フィル・レインハートと申します。以後、お見知り置きを」

パリ警察通信部。

「どうした、何があった!？」

通信部とは基本、一般人からの通報などを受け付けている。そのため、彼らの集まる部屋には、電話機から何から、様々な電子機器が揃えてある。その中でもつい最近設置された、ある者達用の機器が、何かを感知し、警報を鳴らしている。

「特殊な力の波を感知……神術師しんじゅつしです!」

以前からその存在を訴えるように行動を起こしてきた者達……。

彼ら二関する記事は、政府が圧力をかけているため、ほとんど他国に漏れることはない。少し前、東の島国に漏れてしまったといううわさもあるが、もし本当だったとしても、よほどの正義馬鹿でもない限りは、わざわざ関わろうとはしないだろう。気にすることはない。

さて、一度行動を開始してからと言うもの、彼らがいつ本格的に動き出すか分かったものではなかった。そのため、警察は彼らの力を感じし、監視できる機械を、国中のいたるところに設置していた

のだ。

いつでも叩き潰せるように。

「ついに来たか……。位置は？」

「……………この警察署の……。すぐ近くです」

警報を鳴らしたのは、警察署の近く……。最寄の交差点に設置したものだ。

「……………」

女性が立っているのは人通りの激しい交差点。目線の先には警察署がある。が、決して自主をしにきたのではない。むしろ、喧嘩を売りにきたのだ。

足元に自分の力を感知するための機械がある。すでに向こうは自分がここにすることに気づいているだろう。だとすれば、すぐにも不特定多数の警察官がここへくるはずである。

今ごろあの二人は、例の少年と接触しているだろう。彼らの話がつくまでは、自分が時間を稼がなくてはならない。計画の第一段階だ。本人は気づいていないだろうが、あの少年は警察から監視されている。仲間が彼と話をしている間は、自分に警察の目を向けなければならぬ。

お人よしの彼らのことだ。話がついて私が生きていれば、確実に私を助けにきてくれる。それまでの辛抱だ。

「自由奔放なる風の神よ……。我が言の葉により、汝の力をここに映さん」

手を空に向け、交差点の中心で呟く。

我らは力を持つ者……。力あるが故に世から切り離され、抹消の対象として生きてきた。しかし、これからは違う。我らの力をもって、我らの存在を示す。できることなら、私にも……。神術師の行く末を見せてほしい。

神よ……。我らに力を！

「ゴッド・グレイス」

「神術師？」

聞きなれない言葉に、テリオスは首をかしげる。

フィルと名乗った少女の話は自分達のことをそう言った。神術師……なんとも胡散臭い名前だが、目の前で現物を見せられては迂闊に笑うこともできない。

「そうです。具体的には神の力を借り、それを自分が操る技術を持った者のことで、私達を含め、数人がその力を持っています」

神の力……。これはまた宗教的な話になってきた。神なんて、絶対的力を必要とし太古の者達が作り出した幻影であって、実際に存在するものではない。今の今まで、ずっとそう思って生きてきたのだけど、あの超常現象を見た後では、自分の考えに自信がない。

突然現れた二人組みは、普段食事用に使っている椅子に座り、テリオスの出した紅茶を時々すりながら話をしている。テリオス自身も椅子に座っているのだが、なぜ数が足りているのか。実は、今二人組みが座っているのは、彼の両親が使っていた椅子なのだ。毎朝三人で母さんの作った朝食を食べながら、学校に行く時間まで話をしたつけ……。

昔を懐かしんでいるテリオスの様子を、二人は黙ってみている。

彼の両親が既に亡くなっている事は、セレーナからの連絡があったので知っている。目的地へ向かう途中、偶然彼に遭遇したそうだが彼女を迎えに行くためにも、早め早めに話をつけたいのだが……。

「で……さ、その神術師がどうして僕のところ……？」

さすがに他人がいる前で昔の回想に耽^{ふけ}るほど無神経ではないらしい。彼が問うてきたことで、二人も話が進めやすくなる。急いでいる彼らにとっては有り難い事だ。

「それは……あなたのご両親が、我々と同じ神術師だったからです」

パリ、シャルル・ド・ゴール国際空港。

フランスの軍人・大統領のシャルル・ド・ゴールにちなんで名付けられたフランスの首都パリの国際空港に、東の島国から参上した男がいる。

「碧子、悪いがもう来てしまった。後々連絡する」

携帯電話を切り、あたりを見回す男。この男こそ、神術師に関する小さな記事を見つけて、わざわざそれを調査しに来た『よほどの正義馬鹿』である。硬い表情は男の自然体であるが、他人からは常に不機嫌であるように思われやすい。本人はそのことに気づいていないようだが。

少し前まで日本の警察で働いていた男。彼は今、大きな問題に直面していた。

「来てしまったのはいいが……警察署はどこだ？」

第一章 動き出す歯車2（後書き）

空港に現れた男ですが、私の前作である「汚れなき邪悪な心」読んで方なら、誰だかお分かりですよね？

第二章 力の有無 1

警視庁すぐ近くの交差点。先ほどまで数え切れないほどの人間が通過していたが、それが一変。現在は警察が交差点ごと閉鎖してしまい、一般人の影はない。

周りには拳銃を構えた紺色軍団。軽く百人はいるだろう。今から彼らの相手をしなければならぬのだから、憂鬱だ。

神術師と偉そうな名前はついているけれど、決して無敵ではない。器が人間なのだから、銃弾を食らえば血も出るし、もちろん痛い。神術によってそれを防ぐことはできるけど、実際どこまで耐えられることやら……。

自分の生死は置いておいて、少なくともこの力があれば、現実という命題に一矢報いることは可能だ。その後の行く末については、運任せということにしよう。

さあ、始めるよ。風の力、その身に受けるがいい！

やっぱりそうか……。話の流れからして、そう言うことなのだろうとは思っていた。

そう言うことというのは、神術師なる者である、今僕の目の前にいる二人が、わざわざ僕を尋ねてきた理由のことだ。もし僕が何の変哲もない一般の子供なら、彼らがここにくる理由がない。両親が彼らと同類だったとか、彼らを支持していたとか、その辺の理由がない限り、今ここに神術師がいると言う事実の説明がつかないのである。

結局のところ、正解は前者の方。つまり僕の両親も、彼らと同類だったと言うことだ。

彼らの力については今見せてもらったばかりだから、ある程度わかっている。彼らと同じような力を、父さんや母さんが使える人だ

ったなんて……ショックというか、何と言つか……。

「それで……僕もその力を使えるの？」

「まだわかりません。親が神術師であっても、それが子に継承されるケースは、極めて稀ですから」

さつきからこんな感じで話しているのだけど、返答するのはフィルと言う少女ばかりで、隣にいる厳^{いか}つい男は、ずっと黙ったままだ。それどころか、僕と目を合わせようともしない。何か他に気になることがあるみたいだ。

だからって、そんなに無愛想にしくなくてもいいじゃないか……。

「もし使えたとして、その場合僕はどうすればいいの？」

わざわざ訪ねてくるくらいだ。ただ話をしにきたと言うわけではないだろう。何か目的があつて、それを果たすためにここに来ているのだ。その目的と言うのは多分、僕の力だろう。けど、それは神術が使えた場合の話である。もし使えない場合はどうするつもりなのか……。

「その場合は、私たちに協力してもらいます。具体的には、この国の警察や軍事的戦力と、戦ってもらうことになります」

思ったとおりだ。男女が互いの趣味を聞いた時に、どちらかが『国家と喧嘩を少々……』と答えるようなものである。要するに、国家と言う巨大組織を相手に戦争をするつもりなのだ。

僕が神術を使える場合、戦争の最前線に繰り出されることになる。そして……。

「もし……使えない場合は？」

「それが判明し次第、この世から抹消……と言つことになるだろうな」

フィルとは違う、太い声。このとき初めて、男の方が口を開いた。気にしていたことは解決したのだろうか……。

などと呑気な事を思っている場合ではない。この世から抹消とは……。とんでもなく危ない人達に出会っちゃったみたいだ。とは言えもはや逃げられない。大人しく、力が使えることを祈るしかないの

か……。

「ガルベス、彼が怖がっています」

「フン……」

フィルの注意を鼻で返し、そのまま彼は関係のない方向へ向いてしまふ。どうやら自分のイライラをテリオスに向けて発散しただけのようだ。もちろん、この世からの抹消などない。

一方、たちの悪い冗談を言われたテリオスは、頭の中が混乱してわけがわからない。

「あ、心配しないでくださいね。あなたの命を奪ったりしませんから」

呆然としているテリオスを安心させるため、そのようなことはしませんと伝える。ガルベスの言葉を本気にしてしまっていたテリオスとしては、安堵と同時に彼への怒りが込み上げてくる。

何がこの世から抹消だ。そんな危ないことを真顔で言わないでほしい。

「も、もしあなたに神術を使う能力がないなら、私たちが責任を持つて保護します。だから、安心してください」

ガルベスの一言で殺伐としてしまったこの場を、何とか落ち着けようとするフィル。彼女はもちろん、彼がなぜこんなにもイライラしているのかを知っている。しかし、彼女としては一刻も早く、テリオスと話をつけたいのだ。無駄な喧嘩をして時間を食ってしまった、あの人の命が……。

フィルも焦っている。そのことを思い出し、ガルベスは心の中で反省した。

「私たちとしては、今すぐにもあなたに同行してほしいのですが……」

「……………」

彼女の言いたいことはわかる。この男が焦っているのもわかる。僕だってそんなに鈍感じゃない。

しかし、一般人として生きてきた十四年間を、これからの人生を、

そうはいはいと捨てられるわけがない。僕は物心ついたときから、普通に生きることを望み、普通に生きることができるようになりたいながら生きてきた。それがこうも簡単に、突然に裏切られてしまうとは……。普通に生きていた今までの人生は、全て偽りだったとは……。

いや、違うな。心の底ではわかっていたんだ。以前、まだ両親が生きているときに教えてもらった。僕は警察に監視されている。その証拠に、この家には多数の監視カメラや盗聴器が仕掛けられている。それも、僕の両親がこの家に住み始めた時からずっと……。それを聞いたときから、僕の両親や僕自身が普通の人間でないことに気づいていた。公共組織に監視されるような、場合によっては危険な人間なのだと……。

それ以来、監視されていることに気づきながらも、それに耐える人生を歩んできた。学校に行くにしても、友達と出かけるにしても、必ず後ろには黒服の人たちがばれないように追ってきていた。それがどれほどに怖かったか……。

「……わかった。一緒に行くよ」
散々いやな目にあってきたんだ。そろそろ反撃してもいい頃だろう。

先ほどまで冷静だったテリオスの目に宿る殺意。当然フィルやガルベスはその心中を悟る。

「期待を裏切って申し訳ありませんが、あなたの希望通りにはなりません」

「……え？」

頭を傾げるテリオス。一方、フィルは真剣な目で彼の目を見つめる。

「私たちと行動をともにするにあたって、絶対を守っていたただかなくてはならないことが、一つだけあります」

大通りの交差点、その中心で、大型の竜巻が起きている。その中で、女性は無言で待っていた。

それぞれ緑色に変わった目と髪。そして彼女自身を包みこむ緑色のオーラ……。その力を最大限に使い、竜巻で容赦なく襲ってくる銃弾を弾き返していた。

神の力を目の当たりにした警察は、どうしていいのかわからず、上の人間に指示を仰いでいる。下っ端の警察官程度の持っている拳銃では、竜巻を止めることはおろか、貫通させることすらできないのである。

しかし……。いい加減竜巻を起こしているのにも限界がきている。いくら神の力であるとは言っても、器は人間なのだから、力の発動にも限度がある。その力は無限ではないのだ。

彼らはまだ到着しないのだろうか……。少年との交渉に手間取っているのかもしれない。もしそうだとしたら、自分はここで終わらう。覚悟していたこととはいえ、それを受け入れるのはつらい。何とか竜巻の崩壊をとどめていると、外からキュラキュラとキヤタピラの音が聞こえてきた。どうやら戦車を駆り出したらしい。その主砲で竜巻を貫こうと言う魂胆だろう。さすがにそんなにでかい弾が相手では、弱ってしまった竜巻はとても耐えられないだろう。

ドゴオオオッ！

戦車の主砲が竜巻を貫通し、竜巻が消滅する。その瞬間、女性は元の姿に戻っていた。力を使い果たし、立ち上がることもできなくなっている。

「よし、捕らえろ！」

警官の一人が嬉しそうな顔で周りに指示する。先ほどまで無線で上の者に指示を仰いでいた、情けない奴だ。あれが現場の指揮官とは……。下っ端の連中に同情する。

当の下っ端たちは不満そうながら、自分を捕まえようと駆け寄ってくる。立場が下である以上、どれほど無能な上司だろうが、それに従わなくてはならない。悲しい世の中だ。

哀れな下っ端が腕をつかみ、強引に立ち上がらせる。どうやら、自分はここまでのようだ。

後の事は……彼らに任せるとしよう。

ゴアアアアアッ！

諦めて目を瞑った瞬間、突然爆発音と共に赤い閃光が走った。まさか……と思いながら目を開けると、先ほどまでうるさいエンジンを鳴らしていた戦車がバラバラになっているではないか。飛び散った部品が、燃えたままカランカランとに地面に落ちる。

それを見た女性は、フツ……と静かに微笑んだ。忘れていた。自分分は悪運の強い女だった。

「な、何だどうした!?」

「戦車が爆発したぞ!」

ビキビキビキ……!

うつたえている警察官の足を、今度は氷が包んでいく。それは女性を捕らえている警官も同様だ。これで邪魔な腕を振り払うことは容易となった。そんな中、炎と氷の間をすり抜けて、少年が女性の下へとかけてくる。

「セレーナさん、遅れてすみません!」

少年は女性の近くにくると、いまだに腕をつかんだままの警官を殴った。小さな悲鳴をあげて、警官が倒れる。足は氷で固まっている。一度倒れたらもう立つことはできないだろう。

立ち上がれずにもがいている警官を見ながら、少年は不安そうな顔をする。人の顔を殴ったのは今回が初めてなのだろう。やってしまった……と思っているのが表情でわかる。

「公務執行妨害……れっきとした犯罪だぞ。テリオス」

不安げな少年に追い討ちをかけるように、男が呟く。赤い髪、紅い目、そして発せられる赤いオーラ……炎を操る神術師だ。

「ガルベス……」

「遅くなってしまったな。無事でよかった」

温かい言葉だ。それを聞いたセレーナはガルベスの胸に寄りかか

り、そのまま泣き出した。もう少し遅ければ、自分は裁判を起こすまでもなく死刑となっていただろう。異端の力を持つ存在を、『現実』が受け入れてくれるはずがないのだ。

自分は助かった。愛する者とまた会えた。それだけで、嬉し泣きの理由としては十分だ。憎まれ口を叩かれたテリオスとしては言い返すタイミングを失い、不満そうである。

「お取り込み中申し訳ありませんけど、すぐにここから逃げないと」深刻な言葉とは裏腹に、満面の笑みを浮かべた氷の神術師が三人に告げる。一応この場合は片付いたが、何せここは警視庁のすぐ近くだ。いつまた増援が来るかわからない。面倒くさいことになる前にここから退散しなければならぬ。

フィルの言葉を聞いたセレーナがガルベスから離れる。

「私に任せて。得意分野よ。ゴッド・グレイス！」

セレーナの目と髪が緑色に変化し、同色のオーラが発せられる。先ほど力を使い果たしたばかりなので大規模な神術は使えないが、この場にいる四人を別の場所へ移動させることは可能だ。

「ウインド・ゲート（風の門）！」

ヒュオオオ……ッ！

突風が吹き、四人を包む。次の瞬間、彼らはそこから消えていた。

第二章 力の有無2

風の障壁が消えた時、四人は教会の礼拝堂にいた。高い天井、それに達しそうなほどの高さのパイプオルガン。綺麗に並んだ長椅子。実際に来たことはなかったにも関わらず、想像していたものと全く同じであることに、テリオスは驚いた。

「ここが拠点？」

イメージとのギャップではなく、むしろイメージ通り過ぎることに驚愕させられる。いくら神術師って言っても、ここまでキリスト教徒でなくてもいいのになあ……。

微妙な顔をしているテリオスとは対照的に、フィルはさも当然であるかのような顔をしている。

「はい、ここが我々神術師の本拠地、そして……」

フィルがゆつくり歩を進め、テリオスの前に立つ。彼女が振り返った時、礼拝堂の扉が開いた。

人がいた。神術師達だ。十数人の神術師達が、礼拝堂に現われた四人を見つめている。彼らの存在を確認し、フィルは満面の笑みでテリオスの目を見てこう言った。

「私達の家です！」

ワアアアアツ！

途端に教会中が騒がしくなった。仲間の帰還を、神術師達はある者は笑顔で、ある者は涙を流して喜んだ。

さて、この状況を理解できない人間が、一人だけいるのを忘れてはいけない。

待て待て待て待てえっ！何、一体何なんだこの状況はあっ！？誰か説明できる人はいないのか！？気付けば他の三人はテリオスの側を離れている。金髪の氷女こおりおんなはジュース片手に仲間と語り合っているし、緑髪の風女は疲労困憊らしく、長椅子の上で横になっている。残るはあの……。

「期待に込めて説明してやってもいいぞ？」

この赤髪の炎男だ。

ん、何故かな？どうしてそんなに楽しそうなのかな？そうか、僕が困っているのを見て楽しんでるんだね？ああそうですかそうですね。いいですよ。あんたの手なんて絶対に借りな……。

「……お願いします」

心の中で散々罵倒しておきながら、あっさりと頭を下げてしまう自分を憎んでしまう。

仕方ないさ、だって見てよ、この状況。置き去りだよ、完全に。僕だってそれなりに覚悟を決めてここにきたんだ。なのに放置は酷過ぎませんか？ねえ、そう思うよね！？

テリオスの心の暴走をよそに、ガルベスは優しさ溢れる表情でドンチャン騒ぎを眺めている。「騒ぎたくもなるさ」

一言だった。その一言でテリオスの心は冷静ななり、言葉の続きを聞く準備を整え始めている。それほど真剣に聞くべきことだと、ガルベスの言葉が訴えてきたのだ。

ガルベスは先程まで横になっていたセレーナに目を向ける。多少は回復したらしく、今は長椅子に座り、数人の仲間達とゆったり話をしている。

「お前との交渉している間、お前から警察の注意を引きつけるため、セレーナはわざわざ警察署に近い場所で戦いに臨んだ。それがより確実だからだ」

テリオスの方も、フィルに聞いたことなのでそこまでは理解している。分らないのは……。

「恐らく、お前の疑問は二つあるはずだ。一つ、今言ったことが何故この状況に繋がるのか。一つ、何故そうまでして我々がお前を必要としたか……。そうだな？」

全くもってその通りだ。仲間が帰って来たのを喜ぶのは当然かもしれない。しかし、どうしてこれ程の騒ぎになっているのだろうか。そしてもしその理由が分かったとしてもそれはそれで、何故そんな

にも自分が求められたのかが分からない。自分はそれ程重要な人間なのだろうか？

フィルの方を見ると、こっちに気付いた彼女が笑顔で手を小さくない振った。その動作一つからでも、彼女の気品が伝わってくる。

「一つ目は簡単だ。時間を稼ぐにあたって、敵は国の軍事力。神術師と言えど、簡単に退けられるものではない。だからセレーナは、それこそ決死の覚悟で戦いに臨んだんだ。しかも、下手をすればあいつだけじゃなく、お前を含む俺たち全員が殺される可能性もあった。そんな中で、全員が生きて、しかも殆ど無傷で帰ってこれたんだ。それがどれだけ難しいことが、賢いお前なら分かるだろう」

彼らとの交渉を終えてすぐ、セレーナさんが時間を稼いでくれていることをフィルから聞いた。その時、大変だとか、早く助けないとか、そう言う感情はあったけれど、死までは頭に浮かばなかった。それはきつと、神術師だと聞いていたことや、僕自身の考えが甘かったことが、死という発想がなかったことに繋っていたんだらう。

恐らく、他の神術師達は良くてセレーナさんは死に、最悪の場合僕ら四人が全滅することまで想定した上で、フィル達を送り出したんだ。それがどれだけ辛いことが、説明しなくてもわかる。ところどころい、誰一人死ぬことなく帰還することに成功してしまった。これは神術師達にとっても、全く予想していなかったうれしい結果なんだ。それらのことを含めて考えると、この馬鹿騒ぎも妥当なもののように思える。

「そして第二点。お前の必要性……。これに関しては俺もよくわからない。恐らく、俺達のの姫が知っているはずだ」

ガルベスがフィルに目を向ける。こちらの様子が気になるらしく、短時間の間に何度も視線が重なる。その度にフィルは目を背ける。フツ、とガルベスが笑んだ。

「隠し事が下手だな。あれでも神術師達のリーダーなんだ。それ相應の力も人の上に立つ素質もある。しかし、自分のこととなると途

端に奥手になる。元々大人しいからかもしれないが……」

あの歳でこんな強烈な軍団を率いるのは大変なことだろう。子供に一人で十トントラックを引っ張れと言っているようなものだ。

しかし彼の言葉を聞く限り、彼女は今のところその役目を見事に果たしている。誰にでもにできることではない。背負った役目が大き過ぎるせいか……？そう呟くガルベスの姿が僕には娘の将来を心配する父親のように見えた。いや、事実父親と変わらないくらい大切におもっているのだろう。彼だけではない。今この場にいる神術師全員が、彼女を娘のように想い、しかもリーダーとして慕っている。人に愛される素質……それも又、人の上に立つのに必要な要因なのかもしれない。

彼女が何か知っているか……。なら、直接聞きに行くしかないな。テリオスが歩み寄ると、フィルは周りの神術師に席を外す様に頼んでくれた。要件が分かっているのだろう。

「……あなたをこちら側に引き込もうと言い出したのは、私です」引き込むなんて人聞きの悪い……。他はどうか知らないけど、僕は彼女に引き込まれたなんて思っていない。むしろ……。

「あなたは……御両親の神術師として生きていた時代のことを、全く聞いていないでしょう。でも、私達の間ではあの御二人……ヘリオス・ギルハートさんとエルタナシア・ギルハートさんはとても有名な方々なんですよ」なんですよと言われても、どんな感じで有名だったのか、僕には見当が付かない。僕の知る二人は、普通と言う以外に表現が見当たらない程、目立つわけでもなく、地味なわけでもなかった。きつと下手に動く僕にも面倒がかかると思って、出来る限り普通に徹していたのだろう。

早く真実を話してくれていたら、僕ももう少し楽だったのになあ……。

テリオスの心情を知ってか知らずか、フィルは話を続ける。

「御二人は幼少期から、他とは比べ物にならないほどに神術に優れていたそうです。どっちが一番であるか、いつも勝負ばかりしてい

たとか」

何をやっていたんだあの二人は……。さぞかしお互いに勝ちたかったのだろう。神術師同士の戦い……。その場に居合わせなくて良かった。

「周りから見ると、喧嘩というより殺し合いに近かったそうです。でも御二人はいつも本気じゃないと言って止めなかったと聞いています」

その時既に人間離れした戯れ合いをしていたと言うことが……。よくどっちも死ななかったな。

「その優れた能力によつて、神術師のリーダーは事実上ヘリオスさんとエルタナシアさんになりました。御二人も協力して神術師を導こうと決めていたそうです。と言っても、ほんの一瞬のことだったようですけど……」

「？ どうして？」

優れた二人が協力して神術師を率いる……。集団の体制としては問題ない。それが何故、長くもたなかったのだろうか。

その答えは、テリオス自身にあった。

「あなたが御二人の間産まれたからです。その頃ちやうど、神術師と軍事勢力の争いが激化していました。あなたを危険な目に遭わせたくなかったのでしょう。御二人はあなたを連れて神術を捨て、普通の人間として生きると仲間에게、この教会を去りました。当時は彼らを裏切り者と呼ぶ人もいたそうです」

嫌だなあ、そういうダークな感じ。まあ、神術師にとつても重要な時期だったみたいだから、仕方ないと言っちゃ仕方ないけど。

さて、二人のことを聞いたところで、本題に入ろう。

「……神術師は滅び行く者です。子をなすことで同志を増やすことは出来ません。尤も、親の片方が一般人であれば……。ですが」

「？」

フィルは真剣な目でこちらを見ている。混血では神術は継承されない。では純血ならば……？

「父母共に神術師であつた時、神術が子へ継承されたケースが、一つだけ確認されています。もしかしたらあなたもそうかも知れませんが」

だから仲間になつてもらいたかつたつてわけか。両親が強大な力をもつていたのだから、神術が継承されてさえいれば、それ相応かそれ以上の力があるはずだと踏んだのだろう。

親の七光とはまさにこの事じゃないか。まあ、そんなのに頼らないといけない程、彼らは崖っぷちだと言う事が……。

「もしあなたに神術が備わっていたら、とても危険な戦いに巻き込む事になつてしまいます。その……本当に申し訳ありません」

深く深く頭を下げる。神術師の長として、一人の人間として、彼に詫びなければならぬ。これから彼を自分達の勝手な『敗北の戦い』に巻き込まなくてはならない。それがいかに罪深きことか……。彼が何か言葉を発するまで、フィルは頭を上げない。それはテリオスにとつても微妙な状況だった。

「あ、その……何て言うか、まだ僕が神術を使えるかどうかは分からないんだし、仮に使えたとしても、それは僕自身の運命みたいなものだから、君が責任を感じる必要はないよ」

フィルがゆっくり顔を上げる。うわ……。よく見たら泣きそうじゃないか。責任感すぎだよ。放つて置けない人つて、こういうタイプの事を言つんだな。

「その……一緒に頑張ろう」

その言葉で、フィルの表情がこれ以上なく明るくなった。今まで見たことのない、可愛い笑顔だった。

「……はい……」

良かった……。何とかなつたみたいだ。それにしても可愛いなあ……。…。

普通に生きていたらきつと幸せになれただろうに……。そう思うと、テリオスは残念でならなかった。

「そう言えばさっき、継承されたケースが一つだけ確認されたつて

言っていたけど、それって誰なの？」

「あ、はい。それは……」

「 Bannon! 」

フィルが答えようとした時、教会の扉が強く開かれた。神術師達の視線が扉に集中する。

「誰も動くな」

入って来たのはコートを着た男だった。態度からして、神術師ではないらしい。あの髪や目の色は東洋——日本人？

いや、それよりも何だ……この重圧は！？一般人とは思えない圧迫感だ。

まるで鬼にでも遭遇したかのように体が動かない。この圧倒的な気迫……一体何者なんだ！？

「お前達が神術師だな？」

誰も答えない。だが男は彼らが神術師出あると確信していた。コートの内ポケットから蒼い手帳を取り出し、皆に見えるように開く。男の写真と金色のマーク……あの印は確か……。

「東京警察特種刑事育成課、神崎正義しんざき まさよしだ。」

教会全体が、一瞬にして凍り付いた。

第三章 正義の価値1

数時間前、私の前では信じられない事態が起きていた。

一人の女性が緑色の光を身に纏い、警察や軍と戦っている……。

決してこれは冗談などではない。私の眼前で実際にその争いが行われているのだ。

「馬鹿な……」

混乱した私の頭では、そんな陳腐な言葉を放つことさえギリギリだった。

「さしもの神崎正義先生しんざき まさよしでも、動揺を隠せないようすな」

まあ、当然でしょう。そう言いながら、私にコーヒーを差し出し
てくる。この余裕の表情はなんだ。それ程にこの状況を見慣れている
というのか。

今フランスで、何が起きている……？

この男の名はブライアン・クレイドル。フランスの警視總監だ。
以前私が總監に就任した頃に一度顔を合わせたことがある。その時
からどこか他人を見下ろしているような雰囲気を持ち主だった。

今は私を先生と呼んでいるが、心中では欠片程の敬意も持っていない
だろう。

「日本ではどうなされたのですか？總監になられた後に失脚したと
聞きましたが……」

この男……自分で気付いていないのか？今貴様は人を見下す笑み
を浮かべているぞ。

「うむ。こちらでも色々あってな。貴様の管轄では、厄介では済ま
ない事態が起きているようだが？」

空気が張り詰める。今我らは、言葉での戦を展開している。ブラ
イアンは私を日本に帰そうと、一方私は近くの交差点で起きている

信じがたい事態の詳細を聞き出そうと、相手を自分の都合のいい方に言葉で誘おうとしている。

まずは様子見だ。相手がどのように出てくるかを見て、順にこちらからカードを切っていく。

「いや何、日本で起きた事件に比べれば、小さい事ですょ」

無論そんなはずがない。このファンタジックな状態が小さい問題なものか。

日本での惨劇が小さい事だとは毛頭思っていない。しかし、こちららは世界の常識を覆す様な規模の問題だ。どちらが各国に強い衝撃を与えるかなと言っまでもない。

「ですから、こちらの事はこちらに任せ……」

任せて日本へお帰りください。そう言おうとして、途中で言葉が出なくなつた。振り返ると、正義まさよしが鋭い目でこちらを睨んでいる。

背筋が凍つた。その姿はさながら鬼の様だった。正義せいぎの鬼が、強烈な殺意を放ちながらこちらを威嚇している……あの目、一日たりとも忘れたことはない。

神崎正義……こいつこそ、私が世界で唯一恐れた男だ。

奴が総監に就任した頃、当時刑事として日本を訪れていた私は、偶然にも奴に遭遇した。

どうやらリンチされていた少年を助けようと乱入したらしい。だがあまりに数が多く、一人でなぎ倒すのは厳しそうだ。

だが、奴の目はどうだ。強烈な殺気に満ち、倒すどころか殺してしまうのではないかと心配になる。

「その男！」

面倒なので立ち去ろうとした時、男の大声が辺りに響いた。振り返ると、先程の目がこちらを睨んでいる。

……ゾツとした。

「警官だな！？手を貸せ！」

なんて事だ。まさかこちらに気付いていたとは……。

その一言で私は立ち去る訳にはいかなかった。逃げてもチンピラ共が追ってくるだろうし、何よりあの男の目……逃げられる気がしない。

結局私は男に加勢し、チンピラ共を殴り飛ばす事になってしまった。休暇中だったのだが……。

「すまなかったな。何せあの数だ、私一人では少々無茶だったのだな」

少年の頭を撫でながら、男は言った。

いや……。それ以外に言い様がなかった。私の中の野心が警告を発し、この男と深く関わる事を拒絶したのだ。

敵に回す事も……。

「私は神崎正義。この国の警視總監だ。君は……ヨーロッパの刑事か？」

私は驚いた。警視總監とあるう者が、子供一人のためにチンピラと喧嘩をしていたのだ。言われてみれば、服も普通の警官よりも立派であるような気がする。

礼をさせてくれと、男は自分の車に私と少年を乗せ、警視庁へ向かった。

「少年」

まさよし

正義に声を掛けられ、微動だにしなかった少年の小さい肩がビクツと跳ねた。無理もない。この男には常に他人を威嚇している様な独特の雰囲気がある。子供なら怯えてしまうのが普通だ。

本人もそれがわかつているのだろう。出来るだけ怖がらせない様、穏やかに語りかける。

「名を教えてもらえるか？私とていつまでも君を少年と呼びたくはないのでな」

「……晃一」

みなへ こういち
「南部晃一」

奴の努力が実を結び、少年は名を名乗った。ふむ……とだけ、正義は唸った。この男、何も考えていなかったな。

案の定、しばしの沈黙が訪れた。元々全員が初対面。そう長く会話できるはずがないのだ。運動席の正義が次の話題を模索している中、私は若干不機嫌だった。

休暇中喧嘩に巻き込まれたと思ったら、こんな狭い空間に長時間閉じ込められている。

礼などいいから早く私を解放しろ。そう言いたかった。無論言い出せず、奴も新たな話題を見つけられないまま、警察庁へと到着した。

すぐに南部少年の家族を特定する作業には入り、彼は我々と分かれた。

「返す返すすまない。気まずい思いをさせたな」

コミュニケーションというものが苦手だな……。そう言って、せめてもの礼にと訪れた酒場のカウンターの席に腰を下ろす。勤務中ではないのかと問うたら、元々今日は休みだったのだが、部下に呼ばれて警察庁へ出勤する途中で昇一を助けたのだと、そう答えた。

だったら早く部下のところにいけばいいものを……。そう思うが、将来的にこの関わりがどう影響してくるか分からない。不必要な発言は避ける。

「日本へは観光で来たのかね？」

「ええ、まあ」

そんなところだと言っておく。詳細を明かす必要はない。

幸い奴も、そうか……と、深く聞き出すつもりはないらしい。その証拠に、すぐに話を変えてきた。

「君は……警察とは何だと思う？」

随分漠然とした質問だった。だが、何も警察の定義を聞いているわけでないのは分かる。

何の元に行動すべき組織なのか……。そういう理念の話をしているのだ。

考えたこともない。私にとっては仕事に過ぎん。ただ働けていればそれで良い。理念など……。何も言わずに黙っていると、奴は窓

の向こうに目をやった。

「私は警官になった当初、警察とは正義せいぎの集団なのだと思っていた。正義の元に調査し、正義の元に罪人を捕らえる。そう言った組織なのだと思っていた」

馬鹿かこいつは。警察が正義だとうだと言っている気高い組織であるはずがない。所詮は幾多の人間が就く職の一つに過ぎん。そこに大義など……。

生きるために働く。それが人の宿命ではないか。

「だが、違ったのだ。上官や政府から圧力があればすぐに事件から手を引く。下手にたて突いて、職を失わないために。それを初めて見た時、どれほど警察が情けないものかを知った。私は、間違いなく夢を見ていたのだ」

よくわかっていらっしやる。下らない幻想を抱き、警察官となつた者は数知れない。しかし、その全てと言って過言でない数の者達が、現実を知り、夢を捨ててきた。生きてゆくためにだ。

この男もそんなクチだろう。所詮正義など、結果として悪に繋がってしまうことが多々ある。自分の正義は他人の悪……それが心理だ。

「だが私は諦めない」

……は？

この男、今何と言った？まさかとは思うが、諦めないと言ったのか？

「私は今の警察を変えるため、革命を起こそうと思っている。警察を正義の組織に変えるための革命を」

ジョークか？いや、奴の顔は真剣そのものだ——本気で言っている。

「君は笑うかもしれないが、既に革命の種は蒔いてある。私は我が警官人生をかけて、警察に新たな流れをもたらすつもりだ」

その数年後……日本の警視總監神崎正義が、未成年者を警官にしたと言う記事を目にした。

「そう言えば、その後南部晃一君はどうしたのです？」

奴の殺気から逃れるため、話を変えると同時に目を逸らす。

奴の革命は失敗した。しかしそれでも、私は奴が恐ろしい。馬鹿げた考えだと思っていたものが、たとえ僅かであつても実現し、あと一步で成功と言うところまで迫ったのだ。運が悪くなければ、奴の革命は成功していただろうし、そうでなくとも未だ警視總監の座に座り続けていたかもしれない。

その事実が、私はどうしようもなく恐ろしかった。

「……無事に親が見つかり、帰す事が出来た。今はこの国で科学者をしているらしい」

勿論知っている。何せ奴は……。

「少し、資料室を貸して貰えるかね？」

コーヒーカップを置き、正義が立ち上がった。中身は綺麗に飲み干されていた。

「構いませんが、何のために？」

「彼ら……神術師たちについて、私なりに調べておきたいのだ。正義を見極めるためにな」

そう言つて奴は部屋を出て行つた。見せたところで困るような資料ではないが、奴ならそれでも何か行動を起こしそうで不安だ。

正義を見極める……その言葉はつまり、この件において正義が警察にあるか、神術師にあるかを判断すると言う事だ。もしかしたら、いたい一撃を食らうかもしれない……。

「失礼します」

奴が去つた直後、茶髪の青年が入ってきた。

「例の一族は見つかったか？」

現実にそぐわない力を得たのは、何も神術師だけではない。存在するのだ。神を打ち破る、ロンギヌスの槍が。

「はい。しかし少々問題がありまして……」

「ふむ……長くなりそうだな。座れ、今コーヒーを入れてやろう。砂糖の量は私が判断するが良いかな、南部君？」

はい……とだけあの時の少年は答えた。

さて、どうしたものか。勢いで神術師のアジトまで来てしまった。それもただ来たではなく、乗り込むと言う形で……だ。

神術師達は驚きを隠せないでいる。無理もない。超常現象を使つて逃走したにもかかわらず、すぐに場所がバレてしまったのだから。無論理由はあるが、今はどうでもいい。

「……このリーダーは誰だ？」

やむを得まい。乗り込んでしまった以上、何でもありませんと帰る訳にもいかない。向こうとて、簡単には逃がしてくれぬだろうしな。

幸い、神術師達は大人しくしてくれただ。私は超能力者ではない。彼らの手に掛かれれば瞬殺だろう。できれば危険な真似はしたくない。

少し待っていると、金髪の少女が堂々と前へ歩み出た。達也よりも二つか三つ下と言ったところか。しかしこの雰囲気、ただ者ではないな。

「私が神術師の長、フィル・レインハートです。日本の警察が私達に何の御用でしょうか？」

なるほどこれはしっかりしたお嬢さんだ。達也の嫁にでも……おつといかないかん。やれやれ、年をとつてくると考えも情け無くなるものだ。息子の鬱陶しそうな顔が目には浮かぶ。人を見る目は確かな奴だ。私が気になげずとも、あいつはあいつで相手を見つけるだろう。

しかし彼女の様な子供がリーダーとは……他の者を見ても、比較

的若い者ばかりだ。彼らが警察や軍の敵対者……この国の『悪』だ
というのか。

これはやはり……。

「すまなかつたな。警戒しないでくれ。私は何も君達を捕らえるた
めに来たのではない」

突然乗り込んで来ておいて……。自分は理不尽な事を言っている
と自覚した。信じてもらえるわけがない。

事実、銃を下ろした瞬間から、とてつもない殺意が四方八方から
感じられる。

「……では何のために？どうやってここを？」

話は聞いてくれるようだ。さすがに黙秘権は行使できそうにない
がな。

……さあ、見極めの時だ。私はここから先、彼らの言動をみ
のがしてはならない。

国家と神術師……。正義がどちらにあるか、私なりに判断させて
もらう……！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3518b/>

アンチテーゼ

2010年10月28日07時24分発行